

春山合宿先発隊・爺ヶ岳東尾根～赤岩尾根

報告者：E.K

期 日：2016 (H28) 年 4 月 29 日～5 月 1 日

メンバー：7名

<コースタイム>

4/29 鹿島山荘 7:00—ジャンクションピーク 11:55—P3 幕営地 14:00

4/30 P3 幕営地 5:29—P1ピーク 9:26—爺ヶ岳中峰 11:49—冷池山荘 13:31

5/1 冷池山荘 7:05—冷乗越 7:21—高千穂平 9:43—西俣出合 11:34—大谷原 12:

38

4月29日 晴れのち曇り

3時間ほどの仮眠をし、出発の準備をする。晴天のもと鹿島山荘前を出発する。雪は無く、木々は芽吹き草花も生い茂っている。鹿島山荘は管理する人がいないのか、建物の中も荒れた様子が伺える。オババの碑を右に折れ、急斜面を這うように登りだす。

3日分の荷物が肩に食い込み、滝の様な汗が噴き出す。尾根に乗ったところで小休止。

小休止を終え、ジャンクションピークまで頑張ろう、と意気込み出発するも、ほどなくして行く手に笹藪が出現する。以降長い付き合いになるとはこのとき誰も知る由もなかった・・・。歩みを進め、山深くに分け入るほどに熊笹は太く高く立派になり、樹木も混じる体力勝負の藪漕ぎとなった。急登混じりの藪漕ぎは困難を極め、もう無我夢中で道なき道を進む。あちこちから唸り声が聞こえる。地図も出さず、今どこにいるのかなど見る余裕さえもなくなってい

たが、顔を上げると隣の尾根や一際白い稜線が確実に迫ってきているのが分かる。

13時を回ったあたりから意識が朦朧とし足がもつれ始める。そんな頃にYさんの口から放された「そろそろ平らなところを見つけてテント張ろう」の言葉で、何か救われた気分になった。必死で藪を漕いだ結果、頬は切れ、ザックにくくっていた共同装備のマットは途中で紛失（申し訳ありません）していた。

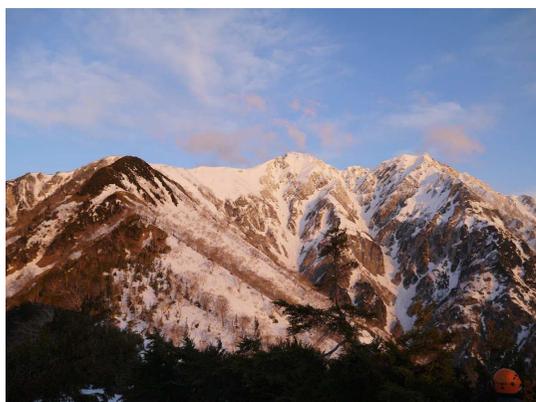


幕営場所を探す先輩方の後ろをヨレヨレの足について行き、ピークより少し下った尾根上にテントを張る。テントに入り暫く

すると、予報通り風が強まり、宴会が始まったテントを叩き始める。

4月30日 晴れのち曇りのち雪

夜通しテントが揺れるほどの強風が吹き荒れたが、夜が明けるとともに次第に止んだ。テントを出ると青空が広がっており、目の前にはモルゲンロートに染まる鹿島槍や爺ヶ岳が聳えている。雄大な景色に感動を覚える余裕が無く、内心、ちょっと遠いな・・・また藪漕ぎがあるんだろうな、と後ろ向きな事を考えていた。



出発の合図があり、本日歩く雪の斜面に緊張を抱きながらYさんの後をついて歩き出す。MさんもYさんも元気いっぱいウキウキしているようで、何か歌っている。穏やかな天気の中、硬く締まった雪面をトラバースしたりしながら順調に高度を上げて行くと、雪面に藪の壁が現れる。

藪を直進するのが正規のルートであるようだが、KさんとAさんの2人は藪を巻く急斜面のトラバースへと向かう。残りのメンバーはYさんを先頭に藪に向かった。藪への取り付きは岩壁から垂直に伸びた松の

幹の木登りから始まっていた。すでによじ登っているYさんは唸り声を上げて苦戦している様だ。これは大変だ・・・。

しかし私も既に松の木に乗ってしまっているため、何とか突破せねば。松の太い幹に抱きつき、アイゼンを食いこませてよじ登る。Yさんも苦戦している様で、枝にしっかりしがみつき、順番待ちをする。後ろを振り返り足元を見るとIさん、その下は急斜面で途中から下が見えなくなっている。もし万が一落ちれば、急斜面を転がり落ち、ただでは済まないと思うと震えた。更に体温がどんどん奪われ、手がかじかみだす。

Yさんが核心部を突破したらしく、OKのコールが降ってきた。枝に手をかけ足をかけ、次の右足は顔の高さ・・・ふんッ！・・・上がらない！Iさんにお尻を押ししてもらい、何とか這い上がる、次はあそこに足をかけ、ヨッコイショッ！と。すると目の前に人の体ギリギリ1人分の木のトンネルが現れた。そこをよじ登れば核心部を突破できるようだが、太い幹が両側から覆いかぶさるように生えており、マットを横付けしている私のザックはどうシミュレーションしても通りそうにない。腕力でねじ込むべきか・・・？うーん・・・。そこへYさんがすぐ横の斜面まで来てくれたので、ザックをお願いする。今考えれば、身を思い切り横に乗り出して、重いザックを指2本で渡す事が出来たのは火事場のクソ力が働いていたのだろう。Yさんの援護で身軽になった私は、木の幹を掴みトンネルを這い上がる。あと一息、リポビタミンDのCMさながらの雄叫びを上げながら頭で松の枝を押し上げると、

ぽっかりと雲の上にでも出たような何とも
言えない平和な光景が視界に飛び込んで
きた。助かった、そして長かった……。テラ
ス状になった岩の上に這い出て、Yさんか
らザックを受取り少し上まで登り、Iさん
を待つ。放心状態になり、しばし景色を眺
める。気が付くと手足がブルブルと震えて
いた。

暫くしてIさんも這い上がってくると、
3人で顔を見合わせ胸をなでおろす。Mさん
とUさんはトラバースの方に移った様だ。
Yさんには何度か謝罪されてしまったが、
登り終えた際の達成感は自信につながり、
今思えばなによりもこの木登り体験が一番
インパクトがあり楽しかった。それに私
の中では春合宿で一番の核心部であったの
ではないかとさえ思う。

少し岩場を登っていくとトラバース組と
合流した。トラバース組の穏やかな表情が
目に飛び込み、何か3人だけが異界にでも
行ったかのような気分になった。

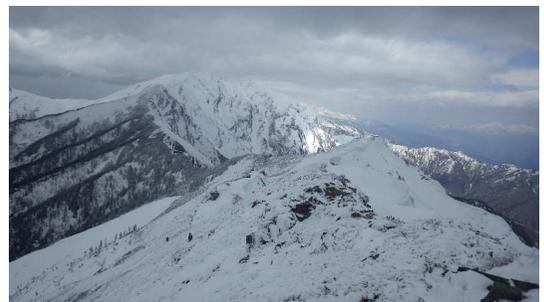
そこからアイゼンを脱ぎしばらく細い岩
尾根を低い樹木の藪漕ぎをしながら標高を
上げて行く。次に待ち構えていたのは急な
雪の斜面。直ぐ目の前の斜面を目で追うと
青空に白い稜線が輝いている。ここが稜線
への最後のアプローチのようだ。気合いを
入れて一気に稜線まで登りつめる。晴天に
より気温もぐんぐん上がり重い雪の急斜面
であったが、KさんやAさんの有難いラッ
セルにより快適に登る事ができた。そして、
Mさんの歩幅やブレのない一定の歩き方を
真似ると疲れず、ここは比較的楽に登れた。
熟達した先輩方の技術を盗めるのもこの会

の良い所で、こういう体験は大変貴重で大
事にしたい。

稜線に出ると信州の山々に大パノラマが
広がっていた。槍ヶ岳に裏銀座、餓鬼岳に、
蓮華にスバリに……。とても気持ちが良い。

ふと頭上には不穏な笠雲が鹿島槍や爺ヶ
岳の上にかかり始めていた。目指す爺ヶ岳
はもうすぐ目の前に迫っており気合いが入
る。広い稜線を所々ハイマツを漕ぎながら
歩く。一度小休止をはさみビーコンを着け
最後の急登に取付く。遠目では分からなか
ったが全体にしっかりと雪が付いている訳
でなくハイマツ帯は融雪が進んでいた。樹
上に薄らと雪が乗りなおかつ急斜面のハイ
マツ帯は足場が不安定で苦勞する。転げ落
ちたくないので必死に無我夢中でハイマツ
を掴みながら登る。後方に別パーティの姿
がちらつき隊列の中で話題になる。

先頭を歩き山頂で待っていたKさんの体
がすっかり冷えた頃、私たちが爺ヶ岳南峰
に到着する。今回の合宿の目玉としていた
MさんとYさんは握手を交わしていた。速
やかに記念撮影を行い、冷池山荘へと急ぐ。



みるみる周りが黒い雲に覆われ雪がちらつき始める。先ほどまで見えていた鹿島槍もすっかり隠れてしまった。冷池山荘のテント場に到着する頃には、本日鹿島槍に向かいたいという先輩はいなく、翌朝に持ち越しとなった。そうと決まれば速やかに幕営をし早々と宴会が始まった。差し入れに頂いたお酒を頂き大いに盛り上がる。その夜は細かな雪が降り続き、我々のテントの中では賑やかなイビキの音と雪がテントを擦る音が夜通し続いた。

5月1日 雪

朝になりテントは15~20センチメートル、またはそれ以上は埋もれていたように思う。支度を整え鹿島槍山頂に向かう。MさんとYさんはお留守番である。

山荘から30~40分歩いた所で頭上で雷鳴が鳴り響いた。暫く斜面に隠れ様子を見つつ撤退となる。テントに戻り1時間程様子を見て下山を開始する。

天気は下り続け赤岩尾根の分岐付近では体が持っていられるほどの強風が吹いていた。Yさんよりトラバースについてレクチャーをして頂きおっかなびっくり緊張しながら慎重に下る。視界は無いが危ないのは分かる。

1つ目のトラバースを渡り終えた後は踏み跡も無く、尾根を下るか更にトラバースするかしばし協議がなされる。トラバースが正解となり先輩方について行くが今度は

長い。所々先輩方が足をとられ、その度に青ざめる。踏みだす一步一步ごとに緊張が走る。氷混じりの風雪が容赦なく顔に叩きつけ恐怖感が増す。



2本目のトラバースを渡り終えたあと進行方向を見失い全員で右往左往する。細い尾根を降り始めた時、Mさんが叫ぶ「おーい、そんなに尾根が細かったか？穴掘って天気の回復を待とう」。ビバークを始めた頃、Kさんが登ってくる人影を見つけ、果敢にも様子を見に行く。単独行の男性により下山ルートを教えて貰い、我々は3本目のトラバースへと入った。既に雪は緩んでおりグズグズになった斜面を歩くのは更に緊張した。無事に渡り終えると後はひたすら下り、何度かトラバースしながらも順調に標高を下げた。

高千穂平に着く頃には雲の下に出た様で町が見えてきた。大町や安曇野の水田に張られた水がキラキラと反射し、私の目にもなぜか反射的に涙が滲んだ。無事に生活圏へと戻って来れた事に、これほどの安堵感と喜びを覚えた山行は初めてだった。また、体力不足の私を参加させてくれた先輩方に感謝の気持ちでいっぱいでした。